

(様式1)

[年度] 令和3年度和歌山県農林水産試験研究成果情報

[成果情報名] 「紀州てまり」の高品質果実生産技術の開発

[担当機関名] 果樹試験場かき・もも研究所 [連絡先] 0736-73-2274

[専門分野] 果樹 [分類] 普及

[背景・ねらい]

かき・もも研究所では完全甘ガキ品種「紀州てまり」を育成し、平成31年4月に品種登録した。本品種は大果で生産者の関心も高く、カキの新たなブランド商材として早期の産地化が期待されています。しかし、本品種の早期産地化を図るうえで、商品性を損なうへたすき果が1割程度発生していることや、接ぎ木更新後に樹高が高くなり管理作業に時間がかかることが問題になります。そこで、「紀州てまり」のへたすき果対策技術および、接ぎ木更新時の省力樹形を開発しました。

[研究の成果]

1. 「紀州てまり」は果実等級（果実重）が大きくなるほど、へたすき程度（写真1）が大きくなります。そこで、最適な着果管理法として、葉果比と摘果時期を検討した結果、葉果比15ではへたすきの発生が抑制されるものの、樹勢が低下する場合がありますため、葉果比25程度で、8月上旬に摘果を行うことが適切と考えられました（図1, 2, 写真2）。また、令和3年に所内と現地圃場において実証試験を行った結果、商品性を損なうへたすき果の割合は平均で4.8%となり（図3）、果実階級は2L~4L中心となりました（データ省略）。
2. 主枝、亜主枝への接ぎ木（省力樹形）を行うことで慣行樹形よりも樹高を低く管理することができます（図5）。収量はやや少なく推移しますが、作業時間（摘蕾、摘果、収穫時間）は省力樹形では慣行樹形よりも短く、脚立を使用せず管理できるため省力化が可能です（図6）。



写真1 へたすき程度（へたを一部除去して撮影）

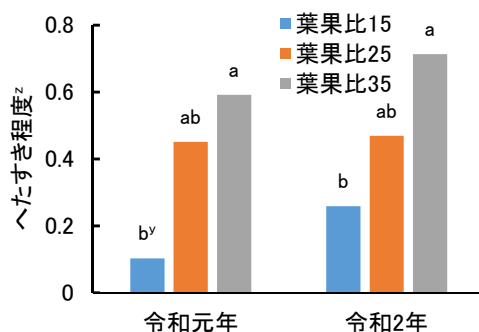


図1 葉果比がへたすき程度に及ぼす影響

z: 全調査果実のへたすき程度を平均して算出
y: Tukeyの多重比較により異符号間には5%水準で有意差有り

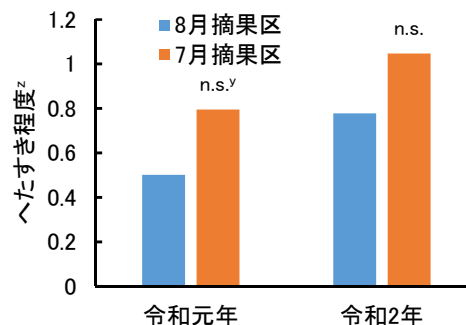


図2 摘果時期がへたすき程度に及ぼす影響

z: 調査果実のへたすき程度を平均して算出
y: t検定により有意差が無いものをn.s.とした

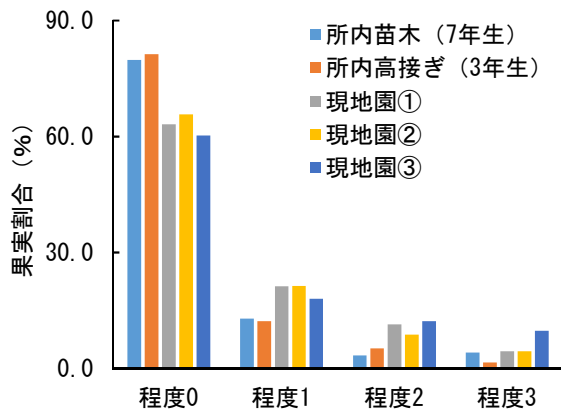


図3 実証試験におけるへたすき果発生割合 (令和3年)



写真2 7年生‘紀州てまり’ (左：葉果比25、右：葉果比15で3年間管理)

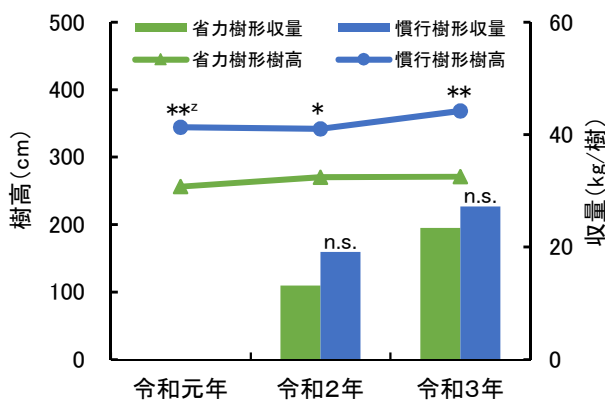


図4 省力樹形が樹高および収量に及ぼす影響
 z : t検定により有意差が無いものをn.s.、5%水準で有意差があるものを*、1%水準で有意差があるものを**とした

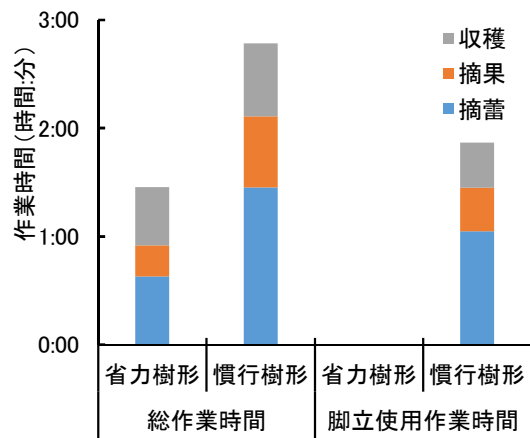


図5 収量10kgあたりの作業時間(令和3年)

[成果のポイントと活用]

1. 最適な着果管理法として、葉果比は25程度(中庸な樹勢の樹では2枝に1果程度)、摘果は他の品種の摘果が終わった後、8月に入ってから行うことで、へたすきの発生を軽減することができます。
2. 接ぎ木更新時に主枝、亜主枝まで切り下げて接ぎ木を行うことで、省力的に管理することができます。ただし、接ぎ木箇所が少なく、枝折れなどが発生しやすくなるため、添え木や支柱への誘引及び、枝幹害虫の防除に努めます。
3. 紀州てまり栽培マニュアル～②へたすき果発生軽減技術および接ぎ木更新時の省力樹形～を令和4年3月に発行しました。

[その他]

予算区分：県単(農林水産業競争力アップ技術開発事業)

研究期間：平成31～令和3年

研究担当者：有田慎、古田貴裕

発表論文等：なし

ホームページ掲載の可否：可